

近畿支部化学教育協議会の活動

近畿支部の化学教育協議会は二つの委員会を持っている。「化学教育委員会」と「化学への招待委員会」である。化学教育協議会に統合された後でも任務を継続している。「化学教育委員会」は主に大学、高校の先生方で構成されており、現在30名の委員がありそのうちの5割弱が高校の先生方である。この委員会は年6回の協議会の企画を担当している。「化学への招待委員会」は約10名の委員からなっており大学の先生方と企業の方と半々である。この委員会は「企業見学会」と「出前講演会」の企画を担当している。これは化学教育委員会時代からの近畿支部の歴史である。それぞれ職業の異なった人たちの集団であるから一同に会して委員会を開くことはどうしても無理があり、二つの委員会に分けざるをえない。予算は化学教育協議会として一本化されている。今回それぞれの委員会がどのような活動をしているかを報告したい。

化学教育委員会は年6回の企画があると書いたが、年が明けた3月の第2週に工業高等専門学校生の化学研究発表会が開催される。

工業高等専門学校生化学研究発表会

今年で(平成15年)第5回を迎えたこの会は、近畿地区にある化学科を有する6校の高等工業専門学校の5年生11人によって発表が行われる。この人選は化学教育協議会が、各高専に推薦をお願いし審査が行われ決定される。発表会のレベルは非常に高く化学会の年会レベルである。第1回の時にはどの程度のレベルが分からないため、いわゆるサクラを用意しあまり難しい質問はしないようにと気を配ったが、まったくの杞憂であった。その堂々たる質疑応答には感心させられた。発表後発表者には近畿支部より、支部長賞として表彰状と盾が贈られる。この表彰は各高専の卒業式に全校生にアナウンスされ、全高専生の励みになっていると聞いている。

化学教育サロン

この会は小学校、中学校、高等学校、大学の化学・理科教育に携わっておられる先生方の交流を目的として8年前に企画された。理科教育の危機が叫ばれて久しいが、この問題を少しでも解決していくには校種を越えた取り組みが必要との認識の下に企画された。毎回小・中・高の先生方の話題提供が行われる。これにプラスされ大学・高専の先生方、教育委員会の方からの話題提供もある。この会の特徴は小・中・高・大の先生方が直接膝を交えて対話することで、各校種間の垣根がなくなり本音で話せることにある。化学会で小・中の先生方と直接かかわりをもっている会が少ない中、貴重な

存在となっている。幸い年々参加者も増えており今後も期待される。また平成13年には「化学・理科教育サロン in 富山」として北陸地区にも同じ趣旨の会が発足している。

大学化学入試問題をめぐる交流会

7月の第1週の金曜日に開催されている。この会は化学入試問題を大学と高校の接点と考え、それを通じて連携を図ることを目的として開催されている。どのように運営されているかということ、近畿圏にある各府県の高校で作っている「理化教育委員会」(府県によって呼び方が異なる)が近畿圏の大学の化学入試問題を検討する。近畿圏で大学入試に化学を課している大学は38校あるが、学部ごとに課す大学もあり検討される入試問題は50を越える。検討された結果が化学教育協議会に送られ、それを各大学に送付する。各大学は指摘されたところを検討し交流会に参加する。当日参加者には各大学の入試問題と、各府県の理化教育委員会の検討結果が渡される。これをもとに高校・大学の議論が始まる。初めころは高校側と大学側との対立が激しかったと聞いている。紆余曲折を経て現在では高校側と大学側は、ともに協力し良い入試問題を作成しようという雰囲気になっている。この交流会のもう1つの効果は近畿圏の大学では入試問題の難問、奇問が減ったことである。

平日にもかかわらず高校の先生方の参加が年々増えているが、学校管理が強まっている現在、どうなるか心配である。

近畿地区化学教育研究発表会

化学教育・理科教育というどうしても学校関係者になりがちである。これを一般市民まで広げることを目的として企画された。この趣旨にそって化学教育・理科教育に関心のある人は誰でも、どんな内容でも発表できる場としている。今年で5年目になるが、多種、多彩な内容となっている。昨年は学校関係者のみならず、2名の学校関係者以外の発表があった。関心はあっても発表の場がない人たちにとって、よい場を提供できたと自負している。

高等学校・中学校生徒化学研究発表会

この催しは各支部でも行われている。近畿支部では年末の12月23日に石川地区で、12月25日に京阪地区で開催されている。今年で石川地区は18回、京阪地区で20回を迎える。京阪地区では発表件数がなかなか増えないのだが、石川地区は年々増加し発表件数は30を越える。また小学生の招待講演もあるなどますます活性化している。そのうち会場を2つにするか、開催日を2日にするかの検討に迫られている。両

地区とも発表者全員に支部長賞として表彰状と盾（これは一学校に一つ）を贈っている。高校での化学実験が減少している今、この会の持つ意義はますます重要になっている。

化学への招待委員会

企業見学会と出前講演会を企画、実施している。企業見学会は毎年1～2回実施している。この催しは対象を高校生にしているので、夏休みか春休みに実施されている。企業の予定もあるだろうし、日程の調整が難しい。しかし企業側に無理をお願いして実施している。企業側の努力には感謝している。この企画は企業側の協力があるかぎり続けていくつもりである。

出前講演会は高校からの依頼で行くのであるが1年に5～6校に出向くことにしている。一度いくと連続して申し込まれることが多いのだが、できるだけ新しく申し込まれた高校に優先的に行っている。今年は日本化学会125周年事業の一環として申し込みのあった11校すべてに行うことになった。

子と親の楽しい化学教室

これも「化学への招待委員会」主催として行っている。夏休みに小学校高学年生とその保護者を対象として行っている。毎年、大阪府立工業高等専門学校と大阪教育大学で行われている。申し込みは非常に多いができるだけ受け入れるようにしている。申込者を5～6のグループに分け、グループごとにそれぞれに準備された実験をしてもらう。実験の様子を見ていると子供も親も熱心に実験している。時には子供よりも親の方が熱中し、子供がほったらかしになる場面も多い。子供と親の両方に化学に関心をもってもらうために企画されたが、非常にうまくいっている。しかし府立高専、大阪教育大の先生方の注がれるエネルギーは大変なものがある。

以上化学教育協議会の近畿支部の活動を報告してきたが、これらを行うにあたり両委員会の委員の努力と熱心さの賜物であることを付け加えておきたい。

隈 弘夫（日本化学会近畿支部 化学協議会議長）

書評・推薦図書

落語横丁の化学そぞろ歩き

高橋昭子・山崎 昶 著
ポピュラー・サイエンス 252 裳華房, 2002
1,600円 + 税



化学は日常に根ざした学問の1つであると言える。それ故に、噺家の語る人々の生活に、化学的な現象が見え隠れしても不思議はない。そんなところから本書は書かれているようだ。

しかし、本書を化学の本とだけ捉えるのはもったいない。有名な落語を紹介した入門書や雑学書といった感じの本である。タイトルには「化学そぞろ歩き」とあるが、筆者のように「落語横丁」に溶け込める化学屋は滅多にいないだろう。その博識に引き込まれて、あっという間に読み終えてしまった。

中身は、化学に留まらず、物理や生物といった他の理科の科目から地理や歴史に至るまで、実に幅広い。このような幅の広さは、筆者の博学によるものであるが、化学が様々なものと関係している学問であることの証にもなるだろう。

本書を読んだ後に落語を聞けば、江戸の昔から日常の生活で、化学的な思考が意識はされなくても、利用はされてきたことがわかり、化学の本質がすうっと体の中に入ってくることだろう。理科が苦手だった方々にも是非勧めたい一冊である。また、理科教育に携わる人たちにも是非読んで頂きたい。内容も話術も落語に学ぶべきものは多いと思う。

そして、これからも、本書のような化学の紹介本がいろいろと出ることを期待したい。まだまだ、化学と結びつけて面白く書ける分野はあると思う。それほど化学は私たちの活動そのものであると、本書を読んで確信できた。

（東京都立駒場高等学校 田中義靖）